2025/10/1
関係各位

Far East Group
会長　大嶋　謙嗣

会報十月号　**宇宙はなぜ唯一無二の個を生むのか**

目次

・人の価値が測れる？
・宇宙はなぜ唯一無二の個を生むのか
・自分という自覚
・愛という繋がり
・自己超越

●人の価値が測れる？

その人間の価値が、もし能力やスキルだけにあるとしたら、それは誰かに代替されうるし、時代や場所が変われば価値も変わる。だから、それだけで人間の価値を測ろうとすると、いずれ自分自身を見失うことになる。じゃあ、人間個々人の価値ってどこにあるのか。私の考えはこうだ。「その人にしか鳴らせない音があり、その人にしか出せない響き」がある。つまり風韻風格である。それは、生き様であり、信念であり、誰かを想いぬく心であり、何かを為そうとする志ではないか。たとえ同じ能力を持っていたとしても、その人が「何を信じ、何に命を懸け、どんな想いでそれを行うか」は唯一無二。魂の込め方、人生の燃やし方にこそ、その人の価値が宿る。だからこそ、「何のためにその力（能力やスキル）を使うのか」を問い続けることは必要なんだと思う。

なぜこんな風に考えるのか。その根拠を、宇宙の造化の摂理と生命の本質という根源から説明する。

まず、根本には「陰陽相補原理と一即多・多即一の思想」がある。これは宇宙のすべては、相反する要素が補い合いながら動的に変化しながら調和しており、同時に、個（一）であるものが全体（多）に影響し、全体もまた個に宿るという考えだ。つまり、宇宙の全体性（調和・循環）を保つには、「一つひとつの個が他と違うはたらきをしているからこそ意味がある」ということである。

生命の本質に目を向けよう。例えばDNAである。人間一人ひとりの遺伝情報は組み合わせとしては天文学的確率だ。なぜ自然は、これほどまでに多様な個を生み出す構造を選んだのか？それは、環境と呼応しながら状況に応じた最適解を生み出すには、

Copyright(C)2012 Far East Group All Rights Reserved.

「違い」が不可欠だからだ。つまり、多様であること＝宇宙的進化における「戦略」なのである。ここで重要なのは、この多様性は、単なるバリエーションではなく、それぞれが「役割」を持って全体の調和に寄与するために存在しているという点である。

ここまでをまとめよう。

①宇宙の摂理は、違いある個が互いに補い、共鳴しあうことで、循環と創造を生み出す構造になっている。

②生命もまた、一人ひとりが唯一無二であるよう設計されている。

③よって、人間の価値は、その唯一性を活かして（自己の実現）、全体とどう響き合い、創造に貢献するか（自他の共栄）にある。

④その唯一性を最も強く発揮できるのが、「その人にしか鳴らせない音」＝生き様・信念・志・愛といった内的な生命燃焼の力である。

つまり、「あなたが、あなたとして生きること（大学の八条目「誠意」）」は、宇宙にとって必要不可欠なのである。そこにしかあなたの響きは生まれない。その響きがあって初めて、世界は成長と調和に近づく。だから、どこまでも自己を成長させること、その命を自分以外の何ものかの為に燃やし尽くすこと、この二つは人間の使命といってよい。

●宇宙はなぜ唯一無二の個を生むのか

では、宇宙そのものがなぜ「唯一無二の個」を生むのか、そこを掘り下げよう。

まず、宇宙創成の最初期であるビッグバンの一点（特異点）には、「すべての可能性」が詰まっていたとされる。そこから爆発的に広がったエネルギーが、時空を創り、光と闇、物質と反物質、秩序とカオスといった「陰陽の対立と補完関係」を生み出していく。ここで一つ、重要な宇宙の性質がある。それは、「完全な均質化を拒む意志」だ。エネルギーは最初、ほぼ均質に広がった。けれども、完全な均質とは完全な死である。変化のない宇宙というのは創造も成長もなくなってしまう。だから宇宙は、「わずかな揺らぎ」を内包し、そこから構造を生んだ。このゆらぎ（＝不均衡・差異・歪み）こそが、構造、創造、命の源である。同じものだけでは何も起こらない。違い、対立、ズレがあるからこそ、動きが生まれ、反応が起こり、命が芽吹く。「陰陽相交って中となす」というお馴染みのフレーズである。易経が愛おしくなる。

さて、ここから生命の変化（進化）に目を転じる。が、ここでは創造説か進化論かという議論には深入りしない…が少しだけ。創造の主体は神様であり、進化の主体は自然の摂理。しかし、神様が自然の摂理を作ったという観点を入れると、それは進化という手段を用いた創造になる。つまり、創造と進化は対立するものではなく、一体である。神様が「意志」なら、進化はその「作用」である。従って、問うべきは「創造か進化か」ではなく、「なぜ神様は進化という手段を選んだか」である。神様に聞かなきゃほんとのところは分からないが、おそらく「共に創るため」だ。もし神様が全てを一瞬で完璧に創造したら、生物は受け身の存在で終わる。しかし、進化という

Copyright(C)2012 Far East Group All Rights Reserved.

プロセスを通すことで、生命は自ら選択し変化し適応する。そしてそこに意志や努力、挑戦や苦悩、成長や変化のドラマが生まれ、生命は、神様（自然の摂理）の意志を担うものへと育っていく。つまり、進化とは「創造（造化）の共同作業」である。未完成から始めるのは、完成へのプロセスにこそ生命の尊厳も喜びもあるからだ。これは日常生活や社会生活でも同じじゃないか。完璧なものを一瞬で出すより、仲間と共に試行錯誤して形にしていく方が魂が燃えるだろ。進化という手段を通じて神様（自然の摂理）はこういっているのかもしれない。「お前も創れ。楽しんで怒って苦しんで悩んで悲しんで喜んで創れ。共に在れ。」

閑話休題。進化は「選択」と「適応」の繰り返し。でもそこには常に、「偶然と必然」が織り交ざっている。同じ環境でも、そこに生まれる個体は、決して同じ姿にはならない。その理由は、進化とは、単なる最適化ではなく、創造の連続だからである。その創造を生み出すエンジンこそが、個の違い、個性、予測不能なゆらぎである。つまり、宇宙は最初から「全体の中で、各個が唯一無二であることを前提として、全体として動的バランス（調和）をとりながら、進化・創造させようとしている。」そういう構造になってる。だからこそ、人間という存在が、「自己を生きること＝自分固有の音を鳴らすこと（自己の実現・風韻風格）」に価値を見出すというのは、宇宙そのものの意志と一致している。この世に八十一億以上の人間がいても、「自分が本気で燃やす魂の響き」は、この宇宙でただ一つの振動だ。誰にも同じものは鳴らせない、誰にも代われない。自分がこの世界に「在る」こと自体が、すでにこの宇宙の一つの特別な「表現」であり、存在そのものが創造のプロセスの一部を担っているということである。だから、存在＝創造である。自分の生き方で自分を生きること、生命を燃やすことが、宇宙の創造の一部になっているのである。

●自分という自覚

生命を燃やして自分を生きる。生命の目的は「生命燃焼」である。その為の有益な方便が「志」を掲げること、「信念」を貫くことである。

まず、「志」とは何か。定義を一言で示すなら、「個が宇宙の中に自らの役割と方向性を見出し、そこに命を投げ出そうとする意志」である。志というものは、「欲望（自分のため）」と「本能（生き残るため）」を超えた先に現れる。つまりそれは、「自己という限定された存在が、全体＝宇宙との繋がりを体得した瞬間に生まれる」ものだ。人は、自分が「部分」であることを知ったとき、そして「部分でありながら、全体に影響を与え得る存在だ」と気づいたとき、そこに使命感や責任感が立ち上がってくる。これが志である。これは「内在する秩序と意志の共鳴」だ。混沌の中から秩序が生まれ、秩序が新たな可能性を生む。この循環を、人間個体の中で意識的にやっている状態が「志を持つ」ということ。だから、志とは「宇宙が無数の可能性を持つ中で、なぜこの命をこの瞬間に与えたのか」という問いに対する、自分なりの答えそのものなのである。

Copyright(C)2012 Far East Group All Rights Reserved.

では、「信念」とは何であろうか？これは一言で言えば、「有限なる自己が、無限なるものと繋がるために打ち立てる、内なる法（自分との約束）」だ。換言すれば、信念とは宇宙（無限の可能性）との通信回線のようなものだ。人は常に、無限の揺らぎ（情報）に晒されてる。でも、それを「受け取る」ためには、チューニング（周波数合わせ）が必要である。その周波数の軸になるのが、己の信念である。

・何を大切にするのか
・何を善とし、何に命を懸けるのか
・何が正しいと信じるのか

これらの奥に信念がある。信念とは単なる価値観ではない。己の存在を通じて、宇宙に何を響かせるかという「己の意志の選択そのものだ。そしてこの信念が、志という「方向」を照らし出す光になる。

つまり、信念＝内なる宇宙の核。そして宇宙との接点。で、志＝全体との関係性の中で「この命をどう使うか」を定めた方向性である。

宇宙は、意志を持った人間に、「選ばせる自由」を与えた。そして、志を立て、信念を貫く者には、その響きにふさわしい「力」を授ける。これが、志と信念の役割である。そしてそこには、愛や共鳴が不可欠である。

●愛という繋がり

なぜ愛や共鳴が、志や信念に不可欠なのか。創造（造化）の根本に「愛」と「共鳴」がある理由を示す。

まず、愛とは何か。造化に資する観点から言うなら、「分離されたものを、再び繋げようとする力＝繋がり・絆」だ。宇宙創成の瞬間、一なるもの（特異点）が「分かれた」ことで世界が始まった。その分離こそが、光と闇、陰と陽、男と女、自己と他者、有限と無限という二元的世界の根源である。この世界は「分かれることで始まり」、「再び繋がろうとする力＝愛」で成長し、進化していく。日本精神からいえば「結び」である。つまり、愛とは進化の駆動力である。

次に、「共鳴」とは何か。共鳴とは、波動同士が重なり、増幅し、響きを強め合う現象であり構造である。単なる物理的現象ではない。例えば、志ある者が志ある者と出会ったとき。ただ声をかけあうだけで、火がつく。震える。それが魂の共鳴（響創）だ。これはなぜ起こるか？それぞれが「宇宙（無限）との接続」を信念として持ち、「自己を超えて何ものかに尽くそうとする志」を持っているからだ。この「尽くす」という姿勢、これが愛の実践形（生命燃焼）であり、「自己超越のベクトル＝自己犠牲」だ。

じゃあ、なんでそれが志や信念に不可欠なのか。それは、志も信念も、本気で立てた瞬間に「孤高・孤独」になるからだ。誰にもわかってもらえないかもしれない。誰にも届かないかもしれない。それでも、やると決めるのが信念であり、志だ。その時、必要なものが「共鳴」だ。自分と似た響きを持つ者、自分の声に共鳴してくれる誰か、

Copyright(C)2012 Far East Group All Rights Reserved.

自分が命を尽くそうとする相手や存在、そこに「絆＝愛」が生まれる。だからこそ、志は生き、信念は貫ける。志とは、「誰かのため」「何かを守るため」「この世界に何かを贈るため（貢献）」に立てるものだ。つまり「愛の形」としての志であり、「共鳴を生むための信念」である。そしてこの宇宙そのものが、「互いに補い合い、響き合うことで無限の創造を続けている」のだから、その流れに沿っている限り、志も信念も、必ず力を帯び、道が開く。だから「その人にしか鳴らせない音」「その人にしかできない響創」と言ったのは、宇宙の秩序そのものなのである。そしてその響きを本気で鳴らすには、己の信念を貫く「力」と、誰かや世界に共鳴し、生命を燃焼させ尽くす「愛」が不可欠なのである。力愛不二。こうなってはじめて、志は天命へと昇華する。

●自己超越

志が天命へと昇華しているなら、その人は己の志に命を懸けている。命とは燃料だ。ただ生きてるだけでは、エンジンは動かない。「何のために使うか」を定めて、初めて動く。しかし、人は基本「死にたくない」「損したくない」「嫌われたくない」と怖がる。つまり、自分ではなく恐怖に命を握られてる。それじゃ、その人の響きなんか鳴らない。中途半端では空気も流れない。だが、命を懸けているというのは、死を覚悟している。それは「命の終わり」を意識することではなく、「この命、自分以外の何ものかに捧げ尽くす」と自分で決めている。死を怖れることよりも、志を裏切ることのほうが怖い。そう思えた瞬間、人間の魂は本来の輝きを放ち始める。このとき、初めて命は完全に自分のものになる。恐怖から解放される。志と信念の燃料として、命を自由に使えるようになる。これが自己超越への第一段階。

次に来るのが、「個を超えた存在との一体感」だ。それは、己の志が、自分以外の何ものかのために「絶対必要だ」と確信できた時。自分の命が、自分だけのものじゃなくなる。他者の涙、世界の痛み、未来への祈り・・・そういう「響き」と繋がることで、自分の意志が、宇宙の意志（造化）と重なってくる。このとき、人間はもう「我執・我欲」で動いているわけではない。「私がしたい」じゃなく、「私が成すべき」になってる。もっといえば、やりたいこととやるべきことが一致する。これが自己超越である。もはや己のために生きてはいない。でも、己の全存在を懸けている。それが「無我」であり、「自己の実現」だ。死を超えた志と信念は、響きとして残る。それが道となり、後の者に灯を渡していく。自分の命は「そこで終わり」じゃなく、「他者の中で生き続ける」とうように形を変える。それが「志の継承」である。命は有限。でも志や響きは連鎖する。

我々は命を他己に捧げると覚悟することで、自由となり宇宙（無限）の一部となる。

今月も健康と健闘を。

Copyright(C)2012 Far East Group All Rights Reserved.